

広島市環境局中工場

光沢があり染みひとつないクリーンさで、穏やかと言ってもいいほど静かな中焼却炉は、現代の都市部でゴミがどのように処理されるかという先入観に挑むものです。元は 1945 年の原爆から 50 年目の節目を刻むべく発注された一連の建物のひとつとして 2004 年に完成したこの工場は、谷口吉生氏（1937 年～）の作品ですが、彼はニューヨーク近代美術館などのプロジェクトも手掛けた建築家です。この施設は、原爆ドームから始まり、谷口氏の恩師である有名建築家の丹下健三氏（1913 年～2005 年）のデザインによるいくつかの建造物を通る、見えない「線」の末端に位置しています。

広島湾を見晴らす海辺の埋め立て地に立つ中焼却炉の一番の写真映える部分は、エコリウムです。この栈橋のような木製の通路（名前は「エコロジー」と「アトリウム」の組み合わせ）は、ピカピカの処理機械が詰まった、木々が点在する巨大な室内の真ん中を通り抜けています。コンピューター管理された効率性の模範であるこの工場は、静かで、人の活動は最小限です。

訪れた人は、通路の先まで進めば湾を見渡す広々とした眺めを楽しむことができ、工場の機能についてもっと知りたい人には、ガイドツアーもあります。訪れた人々は、ゴミトラックが入ってきて積み荷を巨大な穴に入れるのを上から眺めることができます。穴の中でゴミは、巨大なクレーンのような装置で混ぜ合わされてから焼却されます。また、環境に配慮した工場の操業についても説明されます。たとえば、焼却で発生する蒸気は、機械を動かす電力に使われます。